

## 〔国 語〕

○ 実 施 時 間 【 8 : 3 0 ~ 9 : 2 0 】 ( 5 0 分 )

○ 次の注意をよく読んでおくこと。

- (1) 「始め」の合図があるまで問題用紙を開かないこと。
- (2) 問題は 一 ~ 四、15 ページまであります。
- (3) 答えはすべて指定された用紙の解答らんにはっきりと、ていねいに書きなさい。
- (4) 答えを直すときは、きれいに消してから書きなさい。
- (5) 内容に関する質問は受け付けません。
- (6) 気分が悪くなったり、トイレに行きたくなったら、手をあげて監督<sup>かんとく</sup>の先生に合図しなさい。
- (7) 「終わり」の合図があつたら、直ちに筆記用具を置き、解答用紙が回収されるまで待っていなさい。
- (8) 解答上の注意
  - ・ 字数指定のあるものは、句読点〔。、〕および「」や（）なども一字と数えること。
  - ・ 文末表現は、「こと」、「から」など、問いにふさわしい形にし、文の終わりには句点〔。〕をつけなさい。

受験 番号		氏 名	
----------	--	--------	--

一 次の——のカタカナを漢字に改めなさい。

- ① スピーカーを使ってセンデンする。
- ② 博物館にシヨゾウされている国宝。
- ③ 兄はケンチヨウで働いている。
- ④ 外国とボウエキする。
- ⑤ カンタンなレシピの料理。
- ⑥ 天皇へイカがお言葉を述べられる。

二 次の——のカタカナを文脈に則して漢字に改めなさい。

- ⑦ 昭和時代のコウキに起こった事件。
- ⑧ コウキ心が強い少年。
- ⑨ キョウギ場で試合が行われる。
- ⑩ みんなで対策をキョウギする。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

① そのときはたまたま憎たらしいの側へ針が振れているタイミングだったのだろう。二人でスイミングに通うようになって二年ほど経った初夏である。スクールへの行きがけ、いつも待ち合わせている住宅団地の坂の下に着いたのは、幸介のほうが先だった。——だからその箱は幸介が先に見つけた。

住宅団地の案内板の下に、ぼつんと段ボールが置いてあった。箱がみゃーみゃー鳴いている。軽く閉めてある口を、恐る恐る開けると、——産毛だらけの白っぽい毛玉が二つ。ところどころに三毛のぶちがアクセントで入っている。

声もなく見入った。

何て頼りない、やわやわとした生き物なんだろう。あんまりにも小さくて触るのがためらわれるような——

「わー、ねー！」

頭の上から降ってきた声は悟だった。

「どうしたの、これ」

言いつつ幸介の隣にしゃがみ込む。

「ここに置いてあったんだ」

「うわー、かわいい」

しばらく二人ともふわふわの産毛を遠慮がちに指でなでたりしていたが、やがて悟が言った。

「……持ってみる？」

アトピーだから動物に触っちゃいけません、と昔から口やかましい母親の小言が頭をよぎったが、悟が触るのなら自分がそれを見

ているだけなんて我慢できない。大体、見つけたのは幸介が先なのだ。

下から両手ですくい上げるようにして手のひらに載せる。——なんてかいるい！

ずっと触っていたいくらいだったけど、スイミングに遅れてしまう。もう行かなきゃ、そろそろ行かなきゃ、いよいよ行かなきゃ、とお互い後ろ\*を引かれつつ立ち上がる。

帰りがけもう一回様子を見に行こう、とスイミングスクールまでの道のりを転がるように走った。

滑り込みセーフにちよつとこぼれて、先生に二人でこつんと頭を叩かれた。

スイミングが終わって、今度は帰り道を住宅団地の坂の下まで転がるように走った。

案内板の下に箱は変わらなかつたが、子猫は一匹になっていた。誰か拾っていったのだろう。

残った一匹の運命は自分たちが握っているような気がした。額に三毛のぶちが八の字に入った子猫。しっぽは黒カギ。

二人して箱のそばに座り込み、丸くなってすやすや眠っている子猫を穴が空くほど見つめる。——こんなちっぽけでふわふわの生き物を、家に連れて帰りたくない子供なんているだろうか。

もし家に連れて帰ったらどうなるかな、と、お互い頭の中が高速回転しているのが分かった。

うちはどうかな、お母さんはアトピーのことで反対するだろうな、それにお父さんがあんまり動物好きじゃないし……

不安要素が多い幸介に対し、思い切りをつけるのが早かったのは悟である。

「……僕、お母さんに頼んでみる」

「ずるいぞー」

とつさにそう詰ってしまったのは、何回か前のスイミングが尾を引いている。幸介が少し気になっていた女の子が、上級者コースで泳いでいる悟を見てカッコいいねと呟いたのだ（今にして思えば、「カッパだけど、泳いでるときだけはカッコいいね」だったので、誉め言葉として羨ましいかどうかは微妙だったのだが）。

悟は泳ぎが速くてアトピーじゃなくて、お父さんもお母さんも優しいから猫だってきつと飼っていいよと言ってもらえる。

気になるあの子にカッコいいねと言ってもらえるばかりでなく、こんなふわふわでやわやわの生き物をカンタンに手に入れられるなんて、そんな不公平なことがあっていいものか——

ずるいと言われた悟は、まるで急に引っぱたかれたみたいにおろおろしていた。

その戸惑った顔を見て途端に後ろめたくなる。

単なる八つ当たりだということは一歩知っている。

「……だって、僕が先に見つけたのに」

どうにかひねり出した言い訳に、悟はバカ正直に「ごめん」と謝った。

「幸ちゃんが先に見つけたんだから幸ちゃんの猫だよね」

八つ当たりした自分がみつともなくて、怒ったみたいに頷くことしかできなかった。少し気まずく別れ、子猫の段ボールを抱えて家に帰る。

思いがけず、母親はそれほど反対しなかった。

「水泳のおかげかしら、アトピーも最近すっかり出なくなつたし、掃除をまめにしたら大丈夫じゃないかしらね。前におじさんの家に行つたときも猫は平気になつてたし……」

そういえば、最近あまりアトピーのことをうるさく言われなくなっている。病院にもめっきり行かなくなった。

⑤ 強硬な障害物になつたのはむしろ父親だった。

「駄目だ駄目だ、猫なんか！」

最初からこの調子でまったくお話にならない。

「家の中で爪でも研がれたらどうするんだ！ 大体、猫を飼うのだってタダじゃないんだぞ！ 俺は猫を食わせるために写真屋をやつてるんじゃない！」

母も一緒に頼んでくれたが、それが余計に気に食わなかつたらしい。父はますます強情になり、夕飯の前に元の場所へ捨ててこい

と家を叩き出された。

べそをかきながら住宅団地の坂の下まで子猫入りの段ボールを抱えて歩いた。

案内板の下に箱を——置くんなんてとてもできない。さつき気まずく別れたばかりで気が退けたが、幸介は悟の家へ向かった。

「猫、お父さんが駄目だつて……」

出てきた悟に、しゃくり上げながらようやくそれだけ言うと、「分かった」と悟は頷いた。

「任せて、僕にいい考えがあるから！」

言うなり奥へ駆け込んでいく。おばさんに猫のことを頼んでくれるのかなと思って待っていると、悟はスイミングに通っているときに使っているスポーツバッグを肩にかけて出てきた。

「悟、そんなもの持ってどこ行くの？ お父さん帰ってきたらすぐごはんよ！」

「先に食べて！」

悟は言いつつ玄関で靴を履いた。

「僕、幸ちゃんとおちよつと家出してくるから！」

「はア！」

いつも上品で優しいおばさんのそんな引っくり返った声は初めて聞いた。

「ちよつと悟、何言ってるのアンタ！」

おばさんは台所でどうやら天ぷらでも揚げている最中だったようで、慌てふためきつつも玄関まで出てこられずに台所から顔だけ出してあたふたしている。

「幸ちゃん、どういふことなの！」

そんなことは幸介に訊かれたつて幸介にもよく分からない。「はア！」と声を上げたのは幸介も同じだ。いいから、と悟に手を引っ張られて悟の家を後にする。

「こないだ学校の本で読んだんだ。子犬を拾った男の子が元の場所に捨ててこいってお父さんに怒られるんだけど、どうしても捨てられなくて家出するの。そうしたら夜中にお父さんが捜しにきて、飼うんだたら自分でちゃんと面倒見るんだぞって最後に許してくれるんだ」

悟は少し興奮気味に本のあらすじをまくし立てた。

「幸ちゃんもおんなじだから絶対うまくいくよ！ 子犬が子猫になっただけだし！ 僕も手伝うからさ！」

子犬が子猫になるのはともかく、手伝いが入る時点で本とはだいぶ違っているような気がしたが、家出くらいしたらお父さんも少しはかわいそうに思うかも——と軽くそそのかされた。

それじゃあやってみようかと、まずはコンビニでキャットフードを買った。子猫用の物をレジで尋ねると、髪を赤く染めた若い男の店員が「これなら大丈夫じゃないの」とペーストタイプの猫缶を選んでくれた。見かけは恐ろしいが意外といい人だ。

⑦そして住宅団地の中の公園で晩ごはん。悟は家からパンやお菓子を持ち出してきていたので、二人で適当にそれをかじる。子猫には猫缶を開けてやった。

「夜中っていうからには、たぶん十二時くらいまで粘らなきゃ駄目だと思うんだ」

悟は抜かりなく目覚まし時計を荷物の中に入れてきていた。

「でも、そんな遅くまで帰らなかつたらお父さんにすごく怒られないかなあ？」

幸介の父親は家の外では愛想がいいが、家の中では癩癩持ちで怒りっぽい頑固親父だ。

「何言ってるんだよ、猫のためじゃないか！ それに最後には許してくれるから大丈夫だよ！」

許してくれるのは本の中のお父さんの話だよな？ ——というのは悟のやみくもな熱意に圧倒されて言い出せなかった。……う

ちのお父さんは、だいぶキャラが違うと思うんだけど、ホントに大丈夫かなあ。

公園で猫をかまいながら暇を潰していると、犬の散歩やウォーキングのおばちゃんが一々声をかけてくる。

「あら、二人ともこんな遅くまで何してるの。おうちの人が心配するわよ」

この界限<sup>かぎ</sup>では二人とも顔が割れすぎている。場所の選択<sup>せんたく</sup>からしてNGだったんじゃないかと幸介はうつすら疑惑を覚えていたが、悟は特に問題を感じていないらしい。

「心配しないで、いま家出中だから!」

「あらそう、早く帰りなさいよ!」

違う。これは、正しい家出のやり方とは明らかに違う。正しい家出のやり方なんて幸介にもよく分からないが、とにかくこれが違うということだけは分かる。

五人目のおばちゃんに声をかけられるに至って、ついに幸介は悟の家出作戦に異議を唱えた。

「悟、たぶん家出のやり方ってこうじゃない!」

「え、でも本では公園にお父さんが捜しに来るんだけど!」

「うん、でもこれじゃたぶん意味ないと思うんだよね!」

家出くらいしたらお父さんもかわいそうに思うかも、かわいそうと思って猫を飼うのを許してくれるかも——このままでは絶対にそのエンディングにはたどり着けない。

(有川浩『旅猫リポート』講談社文庫)

\*原文を一部改めました。

問1 —— ①とは、どのようなときですか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 悟は普段「カッパ」と呼ばれているにもかかわらず、泳いでいる姿がとてまかつこよく見えたとき。

イ スイミングスクールに二人が通いはじめたばかりの小学校二年生のとき。

ウ 住宅団地の坂の下で見つけた子猫を、二人でやさしくなでているとき。

エ 子猫を飼うことを母に頼んでみると悟が思い切って述べたとき。

オ 幸介が泣きながら子猫の入った段ボールを抱えて悟の家を訪れたとき。

問2 —— \* に入る語として適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 手    イ 髪<sup>かみ</sup>    ウ 指    エ 脚<sup>あし</sup>    オ 姿

問3 —— ②、③について、二人が「転がるように走った」ときの気持ちをそれぞれ三十字以内で説明しなさい。

問4 —— ④とありますが、なぜ幸介は「気まずく」感じたのですか。五十字以内で説明しなさい。

問5 —— ⑤の表現から読み取れる幸介の様子として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 子猫を飼うことに強く反対する両親を、ずっと憎らしく思っていた。

イ 普段から頑固で怒りっぽい父親に対し、強く反発していた。

ウ 幸介が子猫を飼いたいと言ったら、強く反対するのは母親であろうと予想していた。

エ 強情な父親に幸介と一緒にあって頼んでくれた母親に感謝していた。

オ 本当は父親は優しい人だと思っていたので、強く反対されおじけづいた。

問6 —— ⑥とはどのような「考え」ですか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 優しい悟のお母さんにお願ひして、ふわふわな子猫を飼う許しをもらうこと。
- イ 普段から仲の良い幸介を誘って、どこか遠くの知らない場所へ家出すること。
- ウ 家出をした幸介を父親に見つけてもらい、子猫を飼う許しをもらうこと。
- エ 味方になってくれそうな幸介の母親に頼み、子猫を飼うことを認めてもらうこと。
- オ 幸介の父親に、子猫を飼えない幸介をかわいそうだと思ってもらうこと。

問7 —— ⑦に用いられている表現技法は何ですか。次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 直喩 ちよくゆ
- イ 擬人法 ぎじんぽう
- ウ 倒置法 たうちほう
- エ 体言止め
- オ 隠喩 いんゆ

問8 —— ⑧について、「住宅団地の中の公園」に家出をしたことに悟が「問題を感じていない」のはなぜですか。「くから。」に続く形で、文中から二十字以内でぬき出しなさい。

問9 —— ⑨について、幸介が悟の「作戦」に「異議を唱えた」のはなぜですか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 五人のおばちゃんに立て続けに叱られて、家出を続けることがいやだと考えるようになったから。
- イ おばちゃんたちが心の底から自分たちのことを心配してくれているのを感じ、申し訳なくなったから。
- ウ 悟のことを憎らしく思うタイミングだったので、なんとなく提案に反対したくなったから。
- エ 近所のおばちゃんたちが自分たちの家出を軽く考えている様子を見て、腹立たしくなったから。
- オ 家出中という言葉をおばちゃんたちが聞き流す様子を見て、家出する目的を達成できないと考えたから。

#### 四

次のⅠ・Ⅱの文章を読んで、後の問いに答えなさい。

#### Ⅰ

古代からずっと、ドイツ人たちは「森は人間を護<sup>まも</sup>ってくれる存在」と考えてきました。森には正義があり、愛があるのです。近代になると、ロマン派の詩人たちが森の美しさ、正しさを歌っています。『グリム童話』でも、森の中のお菓子<sup>かし</sup>の家で、悪い魔女<sup>まじよ</sup>に食べられそうになったヘンゼルとグレーテルは救われ、魔女が焼け死んでしまいますね。森は善悪をわかまえているのです。

だから森は、木材を切り出す場とか治水に役立つとかいうだけではなく、ドイツ人の魂<sup>たましい</sup>の宿るところでもありました。それだけに、一時は開発されて荒廃<sup>こうはい</sup>してしまった森林も、よみがえらせる努力が懸命<sup>けんめい</sup>になされました。

近代になると樹木の特質もわかってきたので、一九〇〇年代初めからは、すべての木を一斉に伐<sup>き</sup>り生態系破壊<sup>はかい</sup>につながるような伐採<sup>さい</sup>法ではなく、樹木の種類や樹齢<sup>じゅれい</sup>の多様性を維持<sup>いじ</sup>しながら、自然に近いかたちでの伐採が行われるようになりました。その結果、病虫害<sup>かいびょう</sup>による枯死<sup>こし</sup>木をとり去る費用や施肥<sup>ひひ</sup>の費用もなくなり、裸地<sup>はだ</sup>ができることもなくなりました。さまざまな樹木と下生<sup>したば</sup>えが層を成して豊かな生態系を作り、野生動物も適度に維持していけるようになったのです。

じつは日本は、国土の三分の二が森林という世界有数の森林国です。しかし、やみくもにスギやヒノキなどの針葉樹ばかりが植樹され、木材利用を目的に植えたにもかかわらず、放置されている森も少なくありません。一方ドイツは国土の森林率は三二％ですが、アカマツやトウヒをはじめとする針葉樹林にブナやナラなどの広葉樹がミックスされ、バランス良く栽培<sup>さいばい</sup>されています。

A

大本の木材(主伐材)を切り出した後は、その枝や間伐材、製材から出る木切れやおがくずまでも、無駄<sup>むだ</sup>にすることなく使われています。パルプにしたり、薪<sup>たきぎ</sup>やチップ、ペレットにしたりするのですが、それらは家具やワイン樽<sup>たる</sup>、その他建築材料になるだけでなく、工業用材ともなり、さらには各家庭の暖房給湯システムにもごく一般に使われています。

ドイツでは豊富な森林資源を無駄なく利用することに加え、市民による憩<sup>い</sup>いの場としての森林の利用もさかんです。森を生命・生活の源としようという考えから、森林の育成、管理が計画的に行われています。どの森にも縦横に林道<sup>りんどう</sup>が設<sup>し</sup>えられ、途中で休める

ような小屋やベンチ、進路を示す標識も充実していて、市民は気軽に森に入ることができるようになっていっています。そこで、散歩、ジョギング、仲間とのハイキング、サイクリングや乗馬、山菜や果実採りなどを楽しんで、ストレスを解消し生気を養うのです。そのため、森の維持管理や生態系の保全にも、しっかりと努めているのです。

**B**、森をよい状態で保てば土壌の保全につながり、気候の調節（温暖化防止）や二酸化炭素の削減にも役立つことはよく知られています。さらに、<sup>③</sup>森は莫大な量の水を蓄える貯水池の役割も果たしているのです。森がしっかりとしているところに洪水はありません。

ドイツの山岳地帯では大変な雨量があり、積雪も多いのですが、そうした大量の水が一気に川に流れ出ないような調節弁の役割を、森林が果たしてくれています。森はその下に、ダムのように地下水を貯め込んで少しづつはき出し、河川に平均的な水量を供給しています。湖沼などの滞留水、土壌表面をうるおす表層水などの保持にも役立ついて、森林にはさまれた河川では、流域を風水害や土砂崩れなどから守ってくれる防波堤の役割もあるのです。森がフィルターとなってくれば、水質も良好に保たれるのです。

ドイツの森林は、州有林、自治体・団体林、民有林に分かれています。事業経営に向かない困難な山岳地帯などは、州が自然保護とともに管理を行い、他方、民間でも成り立つところは民営化しているということです。中世においては、国王や教会が広大な森をもっていたのですが、それが国有林、州有林として公的管理に移っていったという具合でしょう。

ドイツでは林業は人気があり、森林学も栄えています。森林管理や森作りは、当地の森林生態系にくわしくて専門知識が豊富な森林局・営林署の森林官が行うべきだとされていて、地域主権の仕組みが生きているそうです。そして林業が、自動車、電気・電子、機械の諸産業につぐ大きな主要産業になっていて、経営的にも十分成り立っているところが、おなじく広大な森林を有しながらうまく機能していない日本と大きく違うところでしょうか。

## II

これまで述べてきたことから、森林保護は自然全体の保全の中心に位置する政策だということがわかります。ドイツに水源林や自

然保護林がいたるところにあるのは、こうした理由からです。また、森は畑をとり囲んで、肥沃な表土の流出を防いでくれます。森林がないと農業もできなくなってしまうのです。

持続可能な森林機能の実現に努めるのは、自然全体のエコシステムを護るためです。植林にせよ伐採にせよ、樹の年齢や種類の間のバランスを勘案しつつ管理していますし、一本一本の樹に注意しつつ営林署が隅々まで見渡して、人手と予算に<sup>⑤</sup>＊をつけずに行っています。農業投与は最小限にとどめ、土壌や森林の損傷を回避し、野鳥の巣穴のある樹木を倒すようなことは行わず、樹木の世代交代は天然の更新によって進められるようにする、つまり固有生物種によるエコシステムを作っていくことこそが大切だとされているのです。

(池上俊一『森と山と川でたどるドイツ史』岩波ジュニア新書)

\*原文を一部改めました。

注1 ロマン派…十八世紀末にヨーロッパで起こった精神運動のこと。

注2 エコシステム…生態系。

問1  A・Bには同じ接続詞が入ります。次の中から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。  
ア しかし    イ また    ウ つまり    エ たとえば    オ ところで

問2 ①とありますが、「森は善悪をわかまえている」とはどういうことですか。その説明として次の中から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア ドイツ人が自然を大切にしていた結果、森も人間を愛してくれるようになったということ。

イ ドイツ人は美しい森には、悪い魔女が住んでいるので注意する必要があると考えていたということ。

ウ ドイツの詩人たちが扱<sup>あつか</sup>うテーマには、常に森の美しさや正しさがあつたということ。

エ ドイツ人は、森の中では正義が重視され、悪い行いは罰<sup>ば</sup>せられると考えていたということ。

オ ドイツ人は近代になってはじめて、森には正義があり、愛があると考えようになったということ。

問3 ②とありますが、何のためにこのような努力を行っているのですか。八十字以内で答えなさい。

問4 ③とありますが、このような森の機能を表す語句を本文中から漢字三字で二つぬき出し、答えなさい。

問5 ④とありますが、日本とドイツでは木の植え方においてどのような違いがありますか。六十字以内で説明しなさい。

問6 ⑤が「何の制限も加えない」という意味になるように、に入る語句を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 手垢<sup>あか</sup>    イ 口実    ウ 目鼻    エ 糸目    オ 足跡<sup>あしあと</sup>

問7 次のア～オについて、本文の内容にあてはまるものには○を、あてはまらないものには×をつけなさい。

ア ドイツの森林は、開発によって一時荒廃したが、一九〇〇年代の初めに一度全て伐採されたことで豊かな生態系を取り戻たとされている。

イ 日本は国土の三分の二が森林という世界有数の森林国であり、木材利用のために育てられた森の資源は、無駄なく利用されている。

ウ ドイツでは事業経営の難しい山岳地帯の森林は民間会社が積極的に開拓し、そうでない場所の森林は州が管理するべきだと考えられている。

エ ドイツでは、専門知識が豊富でさらにその土地の森林や生態系に詳しい森林局・営林署の森林官が、森林管理や森作りを行うべきだと考えられている。

オ ドイツでは自然全体のバランスを考えながら森を管理し、固有生物種によるエコシステムを作り上げることが重要だと考えられている。